



St. Paul the First (立教第一)

無花園

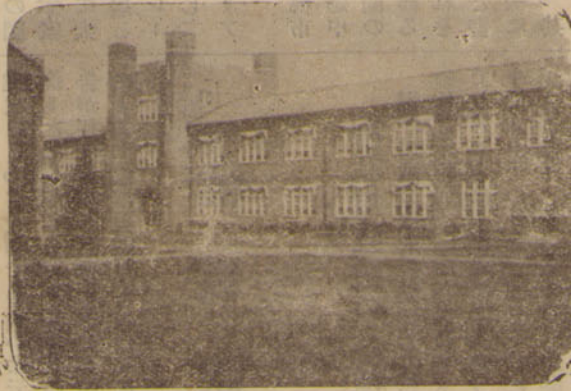
富士の山が遠く武蔵野の彼方に其の美しい姿を灰色のベールで静かに包んで行く。校庭の赤い土が落ちんとする太陽の反射で層一層其赤さを増して居る。赤いゴシックの校舎はも少しで沈む夕陽をさも惜しげに體一ぱいに浴びて居る。

體育館のバルコニーから此の美しい自然美をほしいまゝにした私は雄大なそして詩的なものを興へる自然に對して無限の感謝を表す。同時に武蔵野の一角神秘的な赤煉瓦ゴシック式の宏大なる建築物を所有する我が立教大學に朝夕愛の教を受ける自分の身が如何に幸福であるかを思ふて唯感涙せざるを得ない。私はいつもあの暮れかゝるバルコニーの上から運動につかれた體を休めながら「セントパウル・ゼ・ファースト」と叫ぶのであつた。何んと男性的な叫びではないか。私共は此の四文字をモットーとして進まねばならぬ、社會の眼に映する本大學の名は大方便なるものであるかも知れない。然し母校の有する眞面目なる抱負とそを貫徹せんとする私共學

生の熱誠とは決して他諸大學に劣らざるものと信するのである。そして私共が他大學に對して誇るべき點は我々が大學教育を受ける傍ら愛の宗教たるキリストの教に接し、常に宗教的雰圍氣中に生活しキヤラクターの養成を主眼とするにある。

壯嚴なるチャペルの朝の祈りを告ぐる鐘の音に五百の健兒は凡ての汚れたる心を洗ひ黄金の十字架の前、其日の恵みあらんことを願ふのである。自分は宗教其物よりも凡て人間として此の祈りの心を有する人程幸福なものはないと信するのである。

新大學令に依る我々學生は一致新しき立教にセントパウル・ゼ・ファーストのモットーを高くおし立て外立教の名を廣く世人に知らしめ我々學生の向後の努力を切望して止まざる次第ある寺男が何心なく撞き出す夕の鐘に、咲き誇つた無心の花が心ありげに散つて行く。複雑なる自然に



立教大學校舎ノ一部

も自ら一定の法則があり、雜然たる人事にも自ら一貫せる既定の約束がある「醒めよ努力せよ」と撞き出す武蔵野學會の朝の鐘は諸君の胸底に果してどれ程の眞實なる共鳴の響を見出し得よう？ 寺男は無心である。しかし吾々

は無心ではない燃ゆるが如き愛校心と友情をこめ手には信念の撞木を取り若人の力一杯に「醒めよ努力せよ」の警鐘を打ちならして居る。自分は彼の嚴然たるバルコニー上に立ち、西南に遠く芙蓉の峯を仰ぎ脚下に廣く武蔵野の平原

大正十一年十月十二日印刷
大正十一年十月十五日發行
東京府下東鴨町宮下一四五五
編輯兼發行者 江 尻 登
印刷者 太 田 音 次 郎
東京府下西東鴨町字池袋
發行所 立教大學内武蔵野學會
電話小石川四〇九番
(定價金拾錢)

近代人の生活と廣告

すゝぶね

を眺め乍ら吾等が撞き出す朝の鐘の音がいかにも廣く又高く茫々たる天涯の彼方に響き渡つたる蒼穹の中に消えさるかを思ひ、又いかに多くの眞摯なる諸君が立教ゼ、ファースト、と叫ぶその力ある波動に若き青春の血潮を強く立たしめつ

あるかと云ふ一事に想到する時自分は言ひ知れぬ感激と歡喜とに打たれざるを得ない夕べのとはりは全く落ちて私は再び「セントパウル・ゼ・ファースト」と叫んだ。餘音は廣いグラウンドの隅から隅まで響き渡つた。

近代人殊に都會人の生活は強烈な刺戟をうけて居る。彼等は不斷平靜を欠いた喧騒の中に呼吸し幻惑的な色彩の中に生きて居る故に彼等は不斷アブノーマルな状態に居る。そして、あたかもそれがノーマルな状態であるかの様に思つて都會こそ住むに値する唯一の場處であるかの様に考へて居る。實際彼等が一二ヶ月も都會を離れて生活する様になると異常な詩的趣味を持たない限り田舎の生活に倦怠を覚え、あの熱鬧した騒々しさの中に何等か自己の心を満たしてくれるものゝあるのを知るであらう。事實都會には熱鬧と喧騒と塵埃の外にそれが混沌たる錯綜をなす中から丁度近代の藝術が未來派立體派又はダ、イズム等を生むに至つた様に別種の調和が有り色彩があるものなのであると想はれる彼等都會人はこの調和や色彩美をそのアブノーマルな自己生活に取容れて享樂する事を最近或言葉、それを其の言葉の持つ眞の經濟的意義を没却しては居るが文化生活と名づけるに至つた、無論この言

葉をかう云ふ風に使用される事は誤りで有つたにしろ彼等が不斷に強烈な感覺の刺戟によつて其生活に變化の有る事は事實である。社會にはかう云ふ傾向を捉へて其の人々の上に生活の上に何物かを與へようとする人々の一團がある、彼等は常に其の宣傳に廣告に常に人の視聽を集める様な方法を取つて居る。そして彼等は其の手段によつて成功したり失敗したりして茲にも又桶の中の小芋の様に浮沈常なき競争を演じて居る、之等の一團とは大小様々な商店を私は名指すのである。扱て斯如状態であるから商店は常に競争に打勝つ爲に新たなる手段をえらび新聞にポスターに其の商品店名を廣告しなければならぬ。

茲で私は一寸社會の人々か何れだけ宣傳や廣告によつて其の傾向を左右せらるゝかを研究して見よう最近ロシアから歸つて來た人の話によると、ロシアのボルシエビキの勝利は一方其の宣傳の巧名なにあつた相である。ロシアは始めケレンスキーがツァーリズムを崩

さへ遂行すればロシアは他の先進國よりも進歩する事を暗喻したものであつた。

又續き物のボスターには先にツアアが威風堂々と玉座に座つてゐる其の下にはツアアに諂ふ僧侶や將軍や資本家がこれもツアアの寵遇を受けて労働者を踏みにつつて威張つてゐる漫畫であるが次の圖にはこれ等ツアアや將軍や資本家や僧侶を労働者がハネ飛ばして大勢力を張つてゐる所を示して居るものであつた斯の如くにしてレーニンは少數の特權階級を無視して暗黒なマツスであるプロレタリアートのモツブを捉し立てた。

又古い都市と新しい繁榮の都市とを畫いて古い都市は火焰の過中に有るが新しい町には總て人間の幸福を現はし前者から後者に移るには革命と云ふ川があつて其れを渡るにはどうしてもマルクスと書いた橋を渡らなければならぬ様にしてある大きな繪畫を用ゐた。其他枚舉に遑なき漫畫が有る。又數聞紙上宣傳の威力は特別に強いものであつた。レーニンの幕下にはケルツエツエフの様な有力な新聞記者があつて其のロスタ紙上における宣傳は恐ろしい程の利目があつた(ケルツエツエフは一八四八年の愛蘭の饑飢の主なる原因を知つて居た爲に愛蘭に革命を起した事のある)位乎腕のある者である。

其の進行の恐ろしさに英佛獨の士官連はボツケツトから有りつたけの金を取り出して機關士に運轉をとめて呉れと懇願してゐる繪であつた。之れは言ふ迄もなく革命

命によつて來るのでないと斷念をつけた人間の心にさへも、つまらない漫畫がよく口火をつけて、あの恐るべき革命を來した事に見てもわかる、でこの點をよく考へて先にも云つた社會人の傾向をよく捉え、それによつて巧みに廣告したり宣傳したりするのは如何に商業家にとつて大切であるかは云ふ迄もない事である、そして其の廣告が益々進歩し俗悪なものが競争によつて亡び美的なもののみにな

忙裏談天

緒 一 郎

堀江川波鼓は近松巢林子の夥多の作品中特別に傑出してゐるものでないことは事實でありませう、今便宜上この作品と同じやうに息づまる程じめな戀愛の三角關係を取扱つた大經師昔曆、笹野權三、鏈帷子を持つてきて比較してみても構想行文共に幾分の遜色あるを認めぬわけにはゆかないのであります、特に昔曆の渾然たる到底堀江川波鼓と比すべくもないので

は身動きもならぬまで或る力に壓しつけられるでありませう、腹の底から泣かすにはゐられないであります。

「翁の作として上乘なものではない酒に酔ふて心ならぬ襪重ねしたといふ不快な脚色」だとも二もななく貶しつけてしまつてもあながち無理ならぬことだとおもはれるのであります。

彦九郎女房お種の性格と近松の持つ運命觀とがひしひしと力づよくせまるからであります。たとへ脚色が不倫な行跡を材料にしてあらうが行文が滑らかでなからうが此の劇が持つ特異な力は絶対に他の近松物の追従を許さぬものだらうとおもふのであります、この悲劇發生の動機は一讀「前世の業の毒の酒」であり「無明の酒」であるかの如く考へられるのでありますけれど、それはあまりに皮相の見方であると言ふに憚らぬのであつて寧ろ酒はこの苦い物語にきせ

そこには例の會根崎心中の道行文の絶妙なく關八州繫馬の結構の一絲亂れぬ整然さも缺いてゐるのであります。然しこの作を讀む者

當時の民衆にとつて到底觀るに堪えぬものであつたとは容易に想像し得らるゝのでありますから特更に倫理的拔道を酒につくつたと解釋できるのではありません、或る意味に於ては近松はあまりに「即」きすぎたのでこれが作を温微的にしてしまつたことも争はれぬのであります、お種の性格に悲劇の因を認めるるとき、この作は實に力強く人の胸を打つのであります、酒に歸着するときは禁酒宣傳の好材料以外の何ものでもなく所謂「上乘のものではない」ことになるのであります。

お種は感情ばかりを持合せた女であります、自己を意識するのですら男を通して以外にはなし得ざる程の男あつての女なのであります、感情の女は一から十まで悉く男に頼り切らずには生き得られぬものであります、お種はこの種の女でありました、他の近松の女性が一々例を擧ぐる迄もなく比較的強い理性を持合せてゐるのにこの女は感情一方であります、従つて絶えず止み難い戀心に燃えきつてゐるのであります、甘える氣持の満足、そればかりがこの女の身上だつたのであります、甘えずにはさびしくてさびしくてどうにも堪忍ならぬ滅入つてしまひさうな氣持なのであります。

「よう留守せよとの貌つきが、目にちらちらと見るやうで、ほんに忘るゝ隙もない、ふだん戀してゐるやうで」

ふだん戀してゐるやうな夫の彦五郎が江戸詰だ城詰だと留守勝ちなのはそれだけ寂漠を感じるわけ

であります。

「門さし時の町はづれ、女主人の年若き夫はながの東留守、心たしかに持つためと、一つ過ごする酒好亂れぬ顔もほかつきて重たき頭なで櫛や、向ふ鏡によせいあり、殿待顔の夕かな」

お種の生命の脈は一年経てば夫が歸國するといふ一事で微に保たれてゐるのであります。

それだのにその微かな光を一たまりもなくたゞき消すに充分である床右衛門とははしない経緯をつかまれてしまつたのは鼓の師匠宮地源右衛門とのいたましい交渉がはじまるそもその緒でありました、のつびきならぬ大自然の意志がこの性格上の不具者に迄狂暴な争闘をしかけたのであります、この不具者は案の状血みどろになつてしまひました、堀江川波の鼓の悲劇が展開されたのであります、天の綱島を讀むものはよく精練された都會人の義理と人情のデリケートな交錯にほろつとさせられますけれど、これは人間の力ではどうにも仕様のない力の壓迫に呼吸のつまるのを覚えるのであります、

とおもつたのでありますけれども考察らしい考察もできずにしまつたのは、心からはづかしくおもふのであります、然し私は、今後とも想ひ浮ぶ様々

憂ひ

夜は大部更けて居たので屋敷街は皆淋し過る程シーンと静まり返つて居た。自分は手摺りに寄り添つて北の空をじーつと見詰めて居るので有つた

多過る程茂みを持つた庭の樹木は低地を渡つて来る靜かな大氣の流れに微かに其の緑葉を戦がせ乍ら自分の部屋から投げ出されて居るだるそうな光線にほの白く浮き立つて居た。木の葉をからかつて来た涼んやりした夜氣の流れは、こびる様に頬の邊りを撫で過ぎて行つた。何んと無く物想に沈み度い様な憂ひを帯びた晩である。そして自分は譯も無く何時迄も此暗い空を見詰めて居度くて仕様が無いのだ。其處には只想ひ出した様に明い光を發しては何處かに雷鳴があるのだな！と想はせる電光があるだけなのだ。其の電光が黒雲の様に棚いて居る物とのみ考へて居た空に雲の浮薄な部分が縞を造つて居る事を見せ居るに過ぎないのだ何故自分は其の空から眼を離して雨戸を締め切る譯に行かないのだ

のことどもを自由にそのまゝ書き並べてみたいとは、おもふのであります、内にあるものゝ貧しさは我ながらいまましい程でありますけれど。

紫槽

らうか？此の世に多少なりと長く生を保ち度いと熱望する臨終の病



人が生と言ふものに對して無限の哀憐を感じて居る様な考へて迄も君は過ぎし春突然家庭の事情に迫られて固い決心を以て長く慣れ親しんだ東京に長い別れを告げて北の寒郷に歸へられた。東都を去られる際君を上野に送つた自分は君の今迄親しんで来た總ての環境と別れ遠く淋しい北の國に去るのが

如何にも悲しい……様な表情に接した時有らゆる同情と息詰る様な悲しみはどうする事も出来なかつたのだ。君の内心を知り抜いて居る自分は其れだけ苦しいのだ

自分は餘り他人と慣れ親しむで陽氣な友宜を交へる事の好まいと言ふよりは寧ろ出来ない性質の人間なのだ。然し君とだけは早くから互に心から打ちあけて親しみ合つて居つた、斯ふ言ふ内氣な性質で有るだけ遠い北に君を奪はれたのが遣る瀬無い悲しい氣持を自分に與へて居る。君の苦しい胸の内を知り又餘儀無く歸郷せねばならぬ様にした事情迄知つて居る自分は君を恨む事等は元より不可能な事だ。然し單に何事も皆運命と諦めるのは誠に情け無い。人間なる我々に呪ひの白矢を立て、居る様な現在の社會を心から恨んでやり度いのだ。

安着の報知があつてからしばらく君からは何の便りも無かつた其の間どんなに君の身の上を案じた事だらう。物の二月も経つた頃突然鉛筆の走り書きで現在病床の人となつて居る事又恢復の望み無き事等を知らして来た時、亦どんなに悲しんだ寧ろ驚いた事だらう君の書中の一節に「……私は今現社會に非常な矛盾の件の數有る事を初めて明かに悟つた然も其れが舊來の誤てる習慣と見解とから平氣で通過して行く何と言ふいまいましい非文明な事だ、彼等の所謂文化の叫びは何處に有る事だらう私は現社會に生れ乍ら新しい理想の社會の一員として人生を楽しむ事が出来ないのだ今迄此の事で私

のベストを盡して周囲と闘つて来たけれども其れは見事不成功に終つてしまつた。其して私は今非常に疲れ切つて再び努力を續けるエネルギーさへ咎んど盡きてしまつた力の無くなつた私は、之れ以上惨めな努力を續けて迄も成功しようとはしない心算だ。私には其れはどうせ不可能な事なんだから此の世が私を入れてくれなかつたなら柔順に天命に服して死し恐ろしい死を待つのみである。然し此の世、死は我々の永遠の死で有る現世の生を終れば心身共に再び生の廻り来る筈は無い、嗚呼其の永遠の死が私の面前に迫つて居る私は苦しい……」

何と悲痛な絶望的な叫びだらう力盡きて我が身の破滅を悟り恐ろしい最後の刹那を希ふ、君の心、現世の悲惨事としては餘りに哀れ過る事だ。此の世の死は永遠の死なる事を認め佛法で言ふ所謂來世を認めない。君は生に對して限り無い未練を残して居る事は充分推察出来る。最う一日なりと生命の長引かん事を希ふのは死に行く者の中心よりの迷りに他ならない事だ然るに君は最う死と言ふ自分の最後を自覺し乍ら天命を待つとは實に偉大なる心の持主である全く全然超越しない限り發する事の出來ない言葉なのだ。

君の疲れた身體を病床に横たへて居る有様が目の前にちらつく。近親の者は皆眼を泣きはらして病室に集つて居る。死を超越して居る君は此んな事を言つて居るのが想はれる「死は安らかで無ければならぬ其して神の御召しに應じて

楽しい天国に上る階梯に過ぎないのだ。私の死を決して悲しんで下さるな生の最後にもほほしい涙を見るのが何よりも若しい事だから

願はくは自分も君の傍に行き度い。其して一言半句でも自分の胸の内を話し度いけれど遺憾乍ら君の家庭は其れを許さないのだ君の最後を知りつゝも見舞ふ事の出来ない自分の胸は實際張り裂けるばかりである願はくは幸にして生を保たれん事を。

暗き夜の木蔭に寄りて我は観ぬ君ます空の淡き燈かけを、……昔作つた語らない短歌が其の頃は何とも思つて居なかつたのに今

愚想断片

俺は苦しい

俺の眼の前にはおかもちの玩具があつた。胸には流れに朱の菊が畫いてある。音羽家と云ふ字が洒落た風に三つに列なつてゐた。「音羽家で誰だい？」と俺はきいた。「菊五郎！音羽家の人を一般に云ふんだ」と側にゐる友達に答へた。

「六代目つて誰れだい」と重ねて俺は尋ねた。Rさんの盛んに役者を批評してゐる様子がぼんやりと目の前に浮んで来た。何んだか賑やかな中に一人取り残された様な感じが俺の胸には一杯になつて来た。「六代目つて菊五郎！」俺は返事

突然自分の頭に浮んで来た、北の空はまだ真暗だ。其して電光が時たま想ひ出した様に光り出しては雲の次第に西から東に押し進んで行くのを僅かに示して居る

嗚呼今頃君は何うして居るのだらう。昨日送つた君への返事が果して君の目に入るか何うか、自分の返事も見ないで永遠の眠りに付かれる事は無いだらうか、其れが又心配で仕様が無いのだ。

また雷光が一閃き世の中を呪ふ様な光で其處ら中を照し出した。としばらくして微かな雷鳴が聞へて来る雷雲が徐々に此方に進みつゝあるのだ。

愚助

をはつきり開いたが頭の中には役者の人氣と云つた様な華かなものは浮んで来なかつた。壓しつめられた様な感じで一杯だつた。

部屋の人が四人になつた。ある種の女の話を取りかわされてゐる中に俺は筆を走らせてゐる。然も赤インキで！俺は青より赤の方が好きだ。赤は過激の表象なそうなプリントされる時は黒字になるんだなと考へると誤解されがちな世の中がしつこくつきまとうて来た

俺の心は今にも破裂しさうになつてゐる。「誰れも俺に觸はつて呉れるな。こゝ三四年でいゝから。腫物にさわられると痛いからな」と俺の心は痛切に叫んでゐる何ん

祝創刊

慶應大學御用
諸大學御用

芝區役所通

小川洋服店

電話芝三八九四

親切第一
支那料理

交番西大通

日本一

秋!!

樂器は

師範前通

伊藤へ

革新した

カメラ界の權威

池袋大興俱樂部

進藤寫眞館

冬の御仕度は

是非當店へ

池袋交番西大通

タムラ洋品店

しるこ
萩の餅

師範學校横

松村

寫眞の御用はマツダへ

現像焼附迅速に致し升

師範學校前通

松田寫眞館

祝創刊

大學正門大通

ピリアード池袋亭

皆さんのよく知つてるカフェー

立教大學表門通り

富貴軒

がなく苦しくつて爲方な。俺の
ことを「二重人格を持つてゐる。
然し人には表裏がなくちや世の中
を渡つて行かれない」と嘲笑する
んだか非難するんだか分らない讚
め言葉を呉れた人がゐた俺はそれ
をくやしいとも思はない。情ない
とも思はない。たゞ苦しかった。
俺は淋しい。死にたい程淋しい。
「憂き我を淋しがらせよ閑古鳥」
と云ふ芭蕉の名句に接してからも
う四年の年月は経過してゐる。

俺は悪人

文章は人格を現はすと云ふ。し
て見ると俺の人格なんぞは餘程下
劣な悪黨じみたものだらう。所が
俺はその悪黨じみた所が大好きな
んだ。俺をして純然たる悪人たら
しめよ。悪い人になりたい。ほん
とに悪い人になりたい。否や真正
眞明悪人なんだ。悪いと云ふこと
は百も二百も承知してゐる。たゞ
一々の場合に於て悪人たるを得な
いのが残念なんだ。自分の意見を
徹したいと思はぬことがあつたら
うか。ぼろを指されて腹を立てな
かつたことがあつたらうか。癩癩
を起す人を見て冷笑しないことが
あつたらうか。

「一つでもいゝ事あれば惑ふのに
まるで悪ふて俺の仕合せ」と云ふ
歌を見て喜んだ俺は偉く思はれや
うとしてゐなかつたらうか。
禍なる哉あはれなる人間よ。
「七度を十倍し百倍するまで許せ」
と云つた聖者の面影を俺は思ふ。
「我が心の善くて殺さぬにはあら
ずまた害せじと思ふとも百人千人
を殺すこともあるべし。」と云つた

聖者の面影も絶えず前にある。
俺はこうした聖者のことを考へ
ると悪いが故に一層人生の幸福を
感ずる事が出来る。神様に生れて
來なくてはほんとによかつたと一

虫の聲

遠い處

自分は遠方が好きである
知らぬ世界知らぬ國土未知
の人

稚き日

母の臥戸の浦島の物語りを
初めとして
自分は知らぬ神秘をこの
む………

また稚き日

雨ふりやみたる夕べ………
遼山の彼方に沈む夕陽の
崇嚴なる光景………

それは自分の最初の信仰で
あつた

おゝ遠きものゝ魅力よ………
遠きものゝ美しさよ………

空の後方御星のかゞやく青
海の未だに月の照るあけがた
あゝ美しき遠方を思ふて
悲しみと慰めと吾れに下る

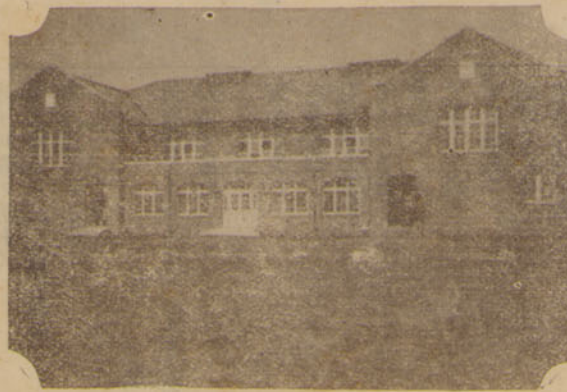
秋の蟲

地から湧き出でる
蟲の音はかなしさうに
ひねもす夜すがら

息をつくことさへある。
俺と云ふ粗雑な言葉を使ふこと
を許るせ俺はまつたく俺にふさは
しい言葉なんだから！

フ キ ハ ル

草の葉蔭にさまよう



母の校の誇り體育館

魂の憂ひ

冷き壁の
わが影は
獨りなり唯獨りなり

常にわが魂

おびえ眼覺めて
すゝりなく時

冷き型の
わが影は

獨りなりだゞ獨りなり

流轉の悠久

(スケプテシズムの歌)
しげる 作

一葉の青葉が音も無くベトンの
冷めたい窓に沿ふて落ちるそれが
何を暗示するか現代人は知らない
時間と空間の羈束を享ける一切は
虚無の本體である事實を未だ綠素
を細胞に湛へながら青い生命は仆
れて行く見えざる外力は内力を超
越して即ち權力は流轉界の——こ
の現實界のローカルカラーに過ぎ
ない極力主張は反對主張の存在を
肯定する如く黙する人間の前にバ
タ／＼と仆れゆく赤い生命の所有
者もある宇宙運行の運命のもとに
彩られゆく斷層の地球の上瞬間の
ダンスに咽び返つてゐる生物の群

自由詩 (朝もや)

町一杯に白く沈んだもや
大事さうに人の町を包んでる。
黄紫赤黒の雜音も包んでる。
沈んだもやの彼處に、
のぞいてるは誰！ 朝日か！

眞夜の星

星様、星君、おい星！
そんなに眼ばたきして、何が怖い
んだ
あなたは月と別れてそんなの？
じや泣いてるんだ。仲がいな

神の力

作平が種子をとりちがへた
朝顔の鉢に葱が伸びた。不思議！
重さ、形は同じた、勿し葱が葱だ
無から生が出て、生から無に行く
人間の一生！

泣く、笑ふ、悲しむ、驚く。不思
議だ。そして死に消えて行くのだ
(笹舟)

若人の嘆

1 今日の日も赤いねもす
歩き暮して家に歸れば
燈涙ぐみて吾を迎ふ。

2 家に親しまぬ子よ
あはれ一と日外に暮して
母の嘆を知らず。

3 何を求めてか さは
歩きくらす
涙ぐまじき若人。

4 そは悲しき癖よ。

受験生のうたへる

不安と堪え難い乾燥の續いた受
験生の生活。其の何日かの間の私は
何も覺えられなかつた。たつた一

つ數えられた事が事があつた。是丈の昔みを享けなければ生きて行かないのかと。

たつたこれだけ。其は私に取つて、數學の公式を百覺えるよりも英語の單語千暗記するよりも、つと／＼貴いものであつた。其の當時のノートを何の氣なしに開けて見たら色々な事が書いてあつた。其も思出の一つになつて了つた。

勉強をし様／＼と思ふけど
忘れぬ姿が浮び出て
アルハベットの字が躍る

涙ぐむ目で本を見りや
アングラインの赤線が
ポツリ／＼とにじんでる。

指切り

雀

夕日さす土藏のかたはら
赤とんぼはスイ／＼と飛ぶ。

白壁にうつる二つの影
小さな手が二つ出て
小指と小指の可愛い／＼もつれ

何の約束？小さな指切り。

赤とんぼスイ／＼と飛ぶ
秋の日のたそがれ。

森 夫

△無題

我母の弱きが故に我父の慈愛の故に我は苦しむ。

△病床にて

血の躍る若さもなくて、今日も亦一日送りぬなめくじること。

△流れゆく親友を思ふ
流れゆく友を見つめて只一輪、深山の谷の白百合。

△文絶えたる舊友の病氣を知りて新しき服に心を躍らして、共に遊びし友と思へば。

黒き

マンドリニスト(戯作)

深 川 茂

月影淡き春の宵
歩みも重く戀戀と
露縁の上或は籬の下
又もマンドラ撫き鳴らし

流離ひ歩りく
黒きは——春猫！

光るは——其惚ゆる青眸！
總ては物狂ほしき彼女の姿態！



眞恐怖の極み！

見るも恐ろし、されど何をか求む
震慄きつ戦慄きつそが惱ましの瓜もて

猶も一齋に掻き亂し奏づる四絃！

そは——窓邊の小夜樂？

そは——斷末の戀樂？

聞けば悲し

哀れに痛ましきは彼女の心！

——一九二二・四・一〇——

紫 樽

秋 淋し

愁思移ろる芭蕉葉に

露とも見ゆる朝霧のはぎの葉末に見舞ふ頃
蜂蟬の夢ほころびつ

梢にかける秋の陽に
めぐり散る葉の風に舞ふ
澄空遠く大鷲の
武藏の原に迷ひしか。

ボブラに戦ぐ風止みて
赤土に壁の影長く
ことほりも無く散る花の
夕の鐘に咽ぶらん。

笹 舟

三省堂タイムスに次のやうな俳詠
が出て居た

濱邊を歩く

乙女等が

男戀ひしと

云ふたらば

女戀しと

云ふてやれ

屹度恐れて

逃げるだろ

逃げた向ふの

沙丘で

男戀ひしと

云ふだらう

僅か足文の文句ではあるが余の
注意を引くに充分であつた作者は

ボビー作としてあつた我々が常に

こんな事を目撃するが云ひ表はず

事に苦を見いだし只大きな聲を出

して笑つたかも知れない眞の女性

と眞の男性は是で一切を含ませて

ゐると思ふ。

祝 創 刊

師範學校北隣

紐育ベーカリー

温いコーヒの香が

皆様をお待ちしてゐます

立學教 地下室ホール

實質的で安價な

洋食は當店の誇

立學教 ブリニューバード

仲よくしませう

師範學校前

カフェー芳本

◆器樂聲樂教授◆

◆舞踏教授◆

露人——キチーシラビナ嬢

顧問 本居長世先生

自由音樂院

池袋ベーカリー横



學生欄

運動記者 K 生

運動部だより

肥馬高天 武藏野いよ／＼碧し 運動のシーズンに入りて各運動とみに活氣を呈す。

野球部 夏期休暇中懸軍万里遙か鮮満の野に遠征を企て、好成績を収めし餘勢をかりて小澤監督統率のもとに太田主將以下部員一同元氣旺盛にして九月上旬以來の猛練習は熱球砂を嚼む猛ごるも紺碧の空を縫ふ長打も發止と受け止むその快技に守備はいよ／＼堅實に打撃も亦遠征後益々練磨せられて單打長打意のまゝに日々の練習中オーバーヘンスの凄いあたりを見せては吾人等の意を強うして居るかくて武藏野の天地に我が立教軍の凱歌を奏する日も近ずいた。因みに今秋に於けるメムバーは左の如し。

中川田我田本井嶋神谷藤 竹坪太吉曾山永橋荒川二水齊原 P C IB HB SS LF CF RF SOB II

庭球部 かの清水熊谷柏尾氏等世界的名選手の歸朝後各大學共に啓發せられて進歩發達せしが我が庭球部に於いても 夏期休暇中も猛練習を續けて今秋勢頭庭球選手權大會には高田 前波 兒玉 野中 秋山氏等出場して健闘し又目下開催中のインターカレッジオ ーブントーナメントにも如上の諸氏の外平澤 澤村 田中氏等出場

し萬丈の氣を揚げたり部員の熱心な眞摯な練習は實に立大の模範にしてその不撓の練習の賜はやがて桂冠をがさず日となる可く期待されてゐる。

柔道部 野球庭球籠球等の新しき運動の中に介在して立大の中堅をなして居る 三笠 市川 坂本 尾崎 萬井の諸氏がその手耳をとつて居る。

バスケット ボール部 立大が最も天下に誇る運動部にして春の全日本選手權大會に優勝して榮あるフラッグを把手しその譽れは燦然陸離都下カレッジの覇權を擅にしたるも名コーチ西村氏野村氏横山氏の全選手の指導よろしきと多數の部員の熱心なる不斷の練習に依るも一つには完備せるチームナードムを有するが故なり今秋は關西遠征を計企し 目下その準備おさ／＼怠りなくいづれば彼地に於いて雄飛活躍その名聲を天下に轟す日も近きにあり 猶遠征軍のメムバーは野村御大を始め横山氏以下主將山内 茂木 佐々木 野村(暈) 野村(久) 松崎氏等老練なる古つは者の面々に新進選手數名を加ふることに内定して居る。

競走部 不振の状態にありしも昨今俄然抜くべからざる勢ひにて盛大におもむき今秋よりはインターカレッジエリートに加盟して去る九月二十三日二十四日駒場臺に奮戦したりき されど今猶過渡時代

にしてスタディアムを有することなれば遠からず名選手に輩出せんと豫想せらる トラックに深津 梨本 北澤 中井 藤井 小西 東城氏フェルドには仁村 野村 河内山氏等熱心練習中である。

水泳部 バスケケットボール部と共に立大の誇りにして今年より新設せられしも八月下旬より野村氏監督の下に多摩川の清流の邊口合宿練習して九月初旬開かれたる専門學校對校競泳には齋藤氏八百米百米背泳に優勝し 元井氏は四百米に勝ち上記二君と坂本野村(暈)二君を加へしレリーチームは奮戦よく三着をかち得て總點數は早明に次ぐ第三位となれり

轟然太き芍藥の大地より發芽せるが如く擡頭した水泳部は更に體協主催の競泳大會にも好成績を擧げて斯界を驚異せしめたり

ボツキシング部 斯界の權位萩野氏が専心部員をコーチして居られる。

相撲部だより

坊

貴紙の榮ある創刊を御祝ひ申し上げます、記者より相撲部に就いて何なりとの仰せ別にこれぞと云ふ事もないので御断りいたそふと思ひましたが、そんな事をすると何だかケチを付けるやうになるので、相撲部の餘太話でも擧げて失禮いたします、優しく弱そふに見えて恐ろしく強いものはと云へば私は先づ立教大學の相撲の選手諸君と云ひます、實際どの人もど人も平常は羊の様に優しい人達

ばかりで、いざ裸になつて禪を下腹に固く締込むと百万の敵も何のそのと云ふ氣概で、その様子は物凄いで程です、うそだと思ふならいつでも練習を見れば、其の猛烈さに成程とうなづくでせす、定評のあつた曉將は世の中の人となつて一生懸命に働いて紳士となつて偉そふに調歩してゐますが、残つて居る人達も今ちや一騎當千の者ばかりです、まあ自慢は此の位として置いて、相撲部の名物男の面白い話にでも移りませう、名物男と云へば皆ながそうでせふ、衣笠君九州男子です袴を腰低くはいて午後になると五尺八寸の體をのそのそと道場に運んで來ます、そこには播州の男子尾崎の榮ちやんが控へて居てあいさつをするとそれが又面白い、「こんち足はどうです」「ハアありがたふ大分よいしよ」側に居る他の面々どつと笑ふ側から大豪の酒家 市川君「菊正宗は何ともハアあの黄金色は、どんな女にも代へられんが」直ぐそれに賛成しながら説明する哲ちやんこれも無耶氣な色氣抜きの有様實際道場と皆なの集合所とも云ふべき尾崎榮ちやんの部屋は私達の娯樂場です、部屋の有様をスツパぬいて見ませうか、豪傑は細事に頓着せずとか、その御多分に漏れず、汚れない汚たい何時掃除するやら塵は積つて山をなすと云ふ有様は、けれ共誰もそんな事には頓着せず、坐つたり寝ころんだりして、食物屋の批評、酒の講義、豪傑の昔物語り、講道館の試合の経過、聞くもの見るものが悉く愉快で氣軽です、たまにはケンの話

も出ますがね、然し茲に一つ面白い事があるので、無粋の皆が一様に音楽が好きと云ふ事です、よくしたもので、此の中に一人鈴木はバイオリンが上手で斯道の通です、それで仲の好い河村のコンチヤンがマンドリンをもつて來ちや名曲を弾いて呉れます、その時にはイカツイ人達が其の妙音に引込まれて百面相のやうな顔をして片吐を呑んで聞入て居ります、それだから羊の様に優しい人達と云つても差支へないでせふ、最後に皆なはよく學ぶ人であると云ふ事を書いて置きます。

新 社 開 参 観

本會々員は二十六日午後一時より東京朝日新聞社を參觀せり。一行二十一名は少憩の後、案内者に導かれ、先づ四階の寫眞室より始め世界各地より直通する無線電信室、調査部の編輯振りを視察し、活字鑄造室にて新聞用活字の自給自足の状況を觀覽し、帝國領土七百五十三箇所より一定時に直通する電話室及び活版を組合せ之を輪轉機に掛け印刷に附す迄の状況を各室を巡りて詳しく説明を聴取し、世界全土に渡りし其の通信網の完備に、或は其の編輯の迅速に、又一日に百萬の新聞の印刷される、状況の説明に驚異の目を張り三時好意を謝して退去せり。

貴紙の榮ある創刊を御祝ひ申し上げます、記者より相撲部に就いて何なりとの仰せ別にこれぞと云ふ事もないので御断りいたそふと思ひましたが、そんな事をすると何だかケチを付けるやうになるので、相撲部の餘太話でも擧げて失禮いたします、優しく弱そふに見えて恐ろしく強いものはと云へば私は先づ立教大學の相撲の選手諸君と云ひます、實際どの人もど人も平常は羊の様に優しい人達

も出ますがね、然し茲に一つ面白い事があるので、無粋の皆が一様に音楽が好きと云ふ事です、よくしたもので、此の中に一人鈴木はバイオリンが上手で斯道の通です、それで仲の好い河村のコンチヤンがマンドリンをもつて來ちや名曲を弾いて呉れます、その時にはイカツイ人達が其の妙音に引込まれて百面相のやうな顔をして片吐を呑んで聞入て居ります、それだから羊の様に優しい人達と云つても差支へないでせふ、最後に皆なはよく學ぶ人であると云ふ事を書いて置きます。

祝創刊

立教大學指定御用

中野洋服店

下谷區谷中町藥專前

創刊祝

武藏野大學指定御用

濱田帽子店

牛込區二十騎町

第四中學角

祝創刊

若紳士向

ストーン式洋服

羅紗地の大暴落

新柄の輸入着荷

米國
シカゴ

ストーン商會

牛込區鶴卷町電停前
電話番町一九八〇

